



日本臨床検査医学会 平成24・25年度 学術推進プロジェクト研究課題に採択されて

新潟病院 臨床検査科 医化学主任 柳田 光利

日本臨床検査医学会は、臨床検査医学(臨床病理学を含む)に関する学理およびその応用についての研究発表、知識の交換、関連学会との連携協力等を行うことにより、わが国の臨床検査医学の発展に寄与することを目的とした創立60周年を迎える歴史ある学会です。

今回、私たちの研究テーマが本学会の主催する「平成24・25年度学術推進プロジェクト研究課題」(研究期間2年間)に採択されましたのでご紹介致します。本プロジェクトの主旨

は「会員の相互協力による臨床検査医学、医療に関わる独創的かつ先進的な研究を奨励、助成して、学会における学術活動の向上、活性化を図る。特に若手研究者(臨床・基礎研究者、臨床検査技師を含む)の育成を目指す」とされています。

採択された研究テーマは【日常検査技術の開発・改善、あるいは問題点の解決に向けての取り組み】における分野で、課題名は「Real-time PCR法を用いたインフルエンザウイルス網羅的検出法の確立とハイリスク患者および脳症患者を主な対象とした臨床的有用性の検討」です。これにより、研究助成金を支給して頂けることとなりました。

本研究の契機は、2009/2010シーズンの新型インフルエンザ[現、インフルエンザ(H1N1)2009]パンデミックであり、その後3シーズンの基礎研究や疫学調査等を通じて得られた結果と、それらをもとに新たに構築した高精度の方法により、今後2年間の臨床的有用性の検討を課題と致しました。

当院では、新型インフルエンザパンデミックに際し、



富沢院長先生指揮のもと「筋ジストロフィー、神経難病、重度心身障害児(者)病棟や小児慢性、Post-NICU 病床等のハイリスク患者から一人の死亡者を出さない」をスローガンに様々な対策を講じました。その一環としてreal-time PCR法を導入し、早期診断および感染拡大防止対策を行いました。この方法は、新型と季節性A型インフルエンザの同時検出と鑑別が可能なPCR法検査(以下2009 PCR法)で、これにより以下の成果を得ることができました。

- ①2009 PCR法はインフルエンザの医療関連感染拡大防止に有用である。
- ②2009 PCR法は感度において(おそらく特異度も)イムノクロマト法に勝る。
- ③同シーズンに流行したA型インフルエンザはほぼ全て(H1N1)2009である。
- ④国内で最も早期にオセルタミビル耐性株(H275Y)を検出し報告した。

[これらの詳細な内容は、第57回日本臨床検査医学会学術集会、第64回国立病院総合医学会、第21

回・22回日本臨床微生物学会総会にて発表し、新潟県臨床検査技師会誌(第52巻3号)に掲載されております。]

一方、2011年4月に新型インフルエンザが季節性インフルエンザに位置付けられたことから2011/2012シーズンは2009 PCR法の積極的な解析を行いませんでしたが、今年になって、抗原検査は陰性で、後日、新潟県保健環境科学研究所に依頼した遺伝子検査の結果、B型陽性と判明したインフルエンザ脳症の小児例を経験しました。その後さらに、インフルエンザ罹患後に脳神経症状を示した症例を経験したため、新たにBも含めたインフルエンザウイルスを網羅的に検出することが可能なreal-time PCR法検査(以下、網羅的PCR法)を構築致しました。網羅的PCR法は、A型の亜型3種類[(H1N1)2009、H3N2(香港型)、H1N1(ソ連型)]にB型を追加した計4種類のインフルエンザウイルス遺伝子を簡便かつ高感度に検出することが可能です。今後の2シーズンは、インフルエンザ様症状を呈した患者の精査や、疫学調査も含め、特に抵抗力の弱いハイリスク患者やインフルエンザ脳症が疑われる症例を主な対象として、診断・治療法選択・感染拡大防止等における有用性を検討する予定です。

研究報告・成果の公表は、日本臨床検査医学会

平成24年10月3日

会 員 各 位

日本臨床検査医学会
理事長 村田 満
学術推進化委員会
委員長 出原 賢治

日本臨床検査医学会学術推進プロジェクト研究採択課題の決定について

平成24・25年度学術推進プロジェクト研究課題は、学術推進化委員会において審査の結果、下記の4課題を採択課題として決定いたしました。

【病態解析領域における独創的あるいは先進的検査技術の開発】

1. 「Bacterial 16S ribosomal DNAのcopy numberを敗血症重症度や治療効果の新たな指標とする検査技術の開発」

代表者：仁井見英樹(富山大学附属病院検査部)47歳
分担者：北島 勲, 宮園卓宜, 森 正之, 上野智浩, 野手良剛
助成額：総額200万円

2. 「質量分析法によるアミロイドーシス診断法の確立」

代表者：植田光晴(熊本大学医学部附属病院中央検査部)38歳
分担者：安東由喜雄, 大林光念, 田崎雅義, 大嶋俊範, 柳澤哲大
助成額：総額100万円

3. 「腹膜透析排液検査法の開発と腹膜劣化指標としての有用性の検討」

代表者：出居真由美(順天堂大学医学部臨床検査医学講座)
分担者：田部陽子, 三宅一徳, 濱田千江子, 三井田孝
助成額：総額100万円

【日常検査技術の開発・改善,あるいは問題点の解決に向けての取り組み】

4. 「Real-time PCR法を用いたインフルエンザウイルス網羅的検出法の確立とハイリスク患者および脳症患者を主な対象とした臨床的有用性の検討」

代表者：柳田光利(独立行政法人国立病院機構 新潟病院 臨床検査科)49歳
分担者：小澤哲夫, 桑村良隆, 菅井めぐ美
助成額：総額100万円

以上

学術集会における発表が義務づけられ、研究成果は原則として原著論文投稿とされております。そのためプレッシャーを感じる反面、非常にやり甲斐のある研究であると痛感するとともに、今後のインフルエンザ感染症治療の一助となるような研究成果を残すべく努力したいと思っております。

最後に本研究の採択にあたり、ご尽力いただきました諸先生方に深謝いたします。